梵文『無量寿経』における一，二の問題

——「勝行段」・「勝果段」を中心に——

畝　部　俊　英

はじめに

無量寿経は九分・十二分教のジャータカ（jātaka），またはアヴァダーナ（avadāna）的文学形式を採用して，阿弥陀仏の前生物語を説いている。

阿弥陀仏は前生において法蔵（Dharmākara）という名前の比丘・菩薩・大士であり，誓願を建て，菩薩の行を修して，阿弥陀仏となるのであるが，いわゆる「勝行段」と呼ばれている個所では，不可思議兆載永劫において，法蔵菩薩は菩薩の無量の徳行を積植したこと，そして次の「勝果段」では，その結果，無数の衆生を教化安立し，無上正真の道に住せしめるような利他の功徳および勝れた身体（勝身）を得たことが述べられている。

筆者は，既に「重誓偈」における若干の問題について取り上げてみた[1]が，本稿では，この「重誓偈」に続く「勝行段」および「勝果段」の個所において（梵文では，「勝行段」・「勝果段」の相応個所を第10章としている）気付いた一，二の問題について論じてみることにする。

一

最初に「勝行段」から取り上げてみたい。『無量寿経』では，

遠離麁言自害害彼彼此俱害，修習善語自利利人彼[※]我兼利。

※彼＝人　宋，元，明の三本，流布本亦同

（麁言の自害と害彼と彼此俱に害するを遠離して，善語の自利・利人と彼我兼利するを修習しき。）

（『無量寿経』巻上（『大正蔵』12巻，269頁，下段））

とある個所であるが，これに対応する梵文は，

bodhisattvacaryāṁ caran, sa yad vākkarmotsṛṣṭam, ātmaparobhayaṁ vyāvādhāya saṁvartate; tathāvidhaṁ tyaktvā yad vākkarma svaparobhaye hitasukhasaṁvartakaṁ, tad evābhiprayuktavān.

（*Sukhāvatīvyūha*, ed. Atuuji Ashikaga（以下，*Sukh.* と略称），p. 24, *ll*. 14～18）

となっている。

この梵文について，主な和訳を次に見てみよう。

(a)　彼ハ覚有情ノ行ヲ修スル時，自他及ビ彼此ヲ害スル語業ヲ捨テテ，自他及ビ彼此ヲ利楽スル語業ノミヲ用ヒタリ。

（南条文雄訳『支那五訳対照　梵文和訳仏説無量寿経・支那二訳対照　梵文和訳仏説阿弥陀経』，1908年，p. 110，以下(a)訳と呼ぶ。）

(b)　菩薩ノ行ヲ行ゼシ時自ト他トヲ害スル如キ言語ヲ棄テツツ自ト他ニ利益アル所ノ言語ヲ勤ム。

（大谷光瑞稿『梵語原本国訳　無量光如来安楽荘厳経』，1929年，49頁，以下(b)訳と呼ぶ。）

(c)　菩薩の行を修する時，自他及び俱を害する如き語業を発すを避け，自他及び俱を利益安楽ならしむる語業のみを勤修したり。

（荻原雲来訳『梵和対訳　無量寿経』（『浄土宗全書』23　梵漢和英合璧浄土三部経　所収），1931年，p. 63，以下(c)訳と呼ぶ。）

(d) かれは，求道者の行ないを実行しながら，自分や他人や自他両方を傷つけるような言葉を口に出すのをやめて，自分や他人や自他両方に利益と幸福とをもたらすような言葉を口にすること，そのことだけにいそしんでいた。

（中村元・早島鏡正・紀野一義訳註『浄土三部経』（上），岩波文庫，第25刷改訳発行，1990年，p. 54，以下(d)訳と呼ぶ。）

(e) 彼は菩薩の修行を実践し，自身を傷つけ他人を害う言葉と行為を離れていた。彼はそのようなものを捨てて，自身と他人の両者に幸福と安楽とを齎すような言葉と行為に精励したのであった。

（岩本裕訳『大無量寿経』（『仏教聖典選』第6巻（大乗経典㈣所収），1974年，p. 109，以下(e)訳と呼ぶ。）

(f) 菩薩の行を実践するとき，かれは自分と他人及びその両方を傷つけるような言葉をあらわすことを避け，そのようなことを捨てて，自分と他人及びその両方に福利と安楽をもたらすような言葉をあらわすことだけにつとめた。

（藤田宏達訳『梵文和訳　無量寿経・阿弥陀経』第2刷，1979年，p. 73，以下(f)訳と呼ぶ。）

(g) 菩薩の行を実践するとき，彼（ダルマーカラ比丘）は言いたい放題な，自分や他人や（その）両者を傷つけるように作用するごときことばを語ることを避け，自分や他人や（その）両者に対して利益と安楽をもたらす作用があるごときことばを語ることのみに努めた。

（山口益・桜部建・森三樹三郎訳『無量寿経』（『大乗仏典』6，浄土三部経），1976年，p. 38，以下(g)訳と呼ぶ。）

以上の和訳のうち，(a)〜(c)の3訳は，マックス・ミュラー・南条文雄校訂本によっており，(d)〜(g)の4訳は足利惇氏校訂本によっているので，両者の梵文は多少違うところがあるが，訳文を見てみると，それほど相違はないと思われる。

さて，梵文と和訳とを対照してみると，すべての訳文がどうも納得できない個所がある。それは，梵文の

yad vākkarmotsṛṣṭam

と

yad vākkarma

の個所の文法的扱い方である。

(a)訳と(b)訳とは，utsṛṣṭam を無視して，

tathāvidhaṁ tyaktvā

と

tad evābhiprayuktavān

の個所の，それぞれ tathāvidhaṁ と tad が対格（Accusative）であるので，(a)訳は「語業ヲ捨テテ」，「語業ノミヲ用ヒタリ」，(b)訳は「…如キ言語ヲ棄テツツ」，「…所ノ言語ヲ勤ム」とあらわし，(c)訳以下は utsṛṣṭam は訳しているが，次のようである。すなわち，(c)訳は，「…如き語業を発すを避け」，「語業のみを勤修したり」，(d)訳は，「…ような言葉を口に出すのをやめて」，「…ような言葉を口にすること，そのことだけにいそしんでいた」，(e)訳は，「言葉と行為を離れていた。彼はそのようなものを捨てて」，「…のような言葉と行為に精励したのであった」，(f)訳は，「…ような言葉をあらわすことを避け，そのようなことを捨てて」，「…ような言葉をあらわすことだけにつとめた」，(g)訳は「言いたい放題な，…ごときことばを語ることを避け」，「…ごときことばを語ることのみに努めた」とある。utsṛṣṭam を訳したと推定される個所を，仮りにアンダーラインを引いてみたが，すべて能動形で訳されている。

utsṛṣṭam は，言うまでもないことであるが，ut-√ sṛj の「放つ，（飛道具を）発射する，（毒を）吐き出す，（糞便を）排泄する，（音を）発する」などが基本的な意味であり，ここでは，vākkarma（語業）とあるから，「（音，声を）発する」の意が適切であることは直ちに見当がつく。(c)訳の「（語業を）発す」は，そのように訳しているが，utsṛṣṭam は，この ut-√ sṛj に過去受動分詞をあらわす ta がついていて，「発せられた」である。

では，このようなことは分かっていて，何故すべての和訳が，utsṛṣṭam を能動形で訳しているのであろうか。

それは，

yad vākkarmotsṛṣṭam

と

yad vākkarma

の個所を文法と意味について充分検討しないままに訳しているからであろう。

上に掲げた個所は，両方とも，関係代名詞の yad 以下，中性，単数，主格であるから，最初に取り上げた，この梵文の全体を訳すならば，

菩薩の行を実践するとき，或る発せられた（utsṛṣṭam）口業が自分や他人や〔その〕両方に害を生ずるので，彼はその種のものを捨てて，或る口業が自己や他人や〔その〕両方に対して利益と安楽とをもたらすものであるので，それのみに努めた。

とでもなるであろう。

tathāvidham は相関辞（correlatives）の tad と同じように見做すことができるから，yad... tad の構文が対句的にあらわされているのである。

漢訳『無量寿経』が，

遠離麁言自害害彼彼此俱害，修習善語自利利人彼我兼利。

と訳しているのを，改めて見直してみると，対句表現であらわされ，「麁言」と「善語」がそれぞれ「自害害彼彼此俱害」と「自利利人彼我兼利」の主

語であって，しかも「遠離」と「修習」に対しては，それぞれ「麁言自害害彼彼此俱害」と「善語自利利人彼我兼利」が目的となっている。実に巧みな訳文であると思う。

二

次に「勝果段」における問題を一つ取り上げてみたい。「勝果」とは，前に述べたように，法蔵菩薩が菩薩の行を実践し，自分が得，他の人々に得させた，すぐれた果報という意味であるが，ここに，法蔵菩薩が勝身，すなわち，すぐれた身体を得たことが出てくる。三十二相や八十種好の身体を得たことも述べられているが，次のような個所がある。

其手常出無尽之宝・衣服・飲食・珍妙華・香・※(一)繒蓋・幢・幡・荘厳之具。如是等事超諸※(二)人天，於一切法，而得自在。

※(一)繒＝諸　麗本

※(二)人天＝天人　宋，元，明の三本，流布本亦同

(その手より常に無尽の宝・衣服・飲食・珍妙の華・香・繒蓋・幢・幡・荘厳の具を出だす。かくのごときらの事，もろもろの人天に超えて，一切の法において自在を得たりき。)

(『無量寿経』巻上（『大正蔵』12巻，269頁，下段――270頁，上段)

これに対応する梵文は，

tasya sarvaratnālaṁkārāḥ, sarvavastracīvarābhinirhārāḥ, sarvapuṣpadhūpagandhamālyavilepanacchatradhvajapatākābhinirhārāḥ, sarvavādyasaṁgītyabhinirhārāś ca sarvaromakūpebhyaḥ pāṇitalābhyāṁ ca niścaranti sma. sarvānnapānakhādyabhojyalehyarasābhinirhārāḥ sarvopabhogaparibhogābhinirhārāś ca pāṇitalābhyāṁ prasyandantaḥ prādurbhavanti. iti hi sarvapariṣkāravaśitāpāramiprāptaḥ sa Ānanda Dharmākaro bhikṣur abhūt, pūrvaṁ bodhisattvacaryāṁ※ caran.

※bodhicaryās をマックス・ミュラー・南条本によって改める。

(*Sukh*. p. 25, ℓ. 24～p. 26, ℓ. 6)

となっている。

この梵文についても，主な和訳を次に見てみよう。

(a) 一切宝ノ荘厳，一切衣服，一切ノ華，焼香，香，鬘，塗油，傘蓋，幢，幡，及ビ一切ノ楽器，詠歌ノ諸相ハ彼ノ一切ノ毛孔及ビ両手掌ヨリ出デタリ。一切ノ食料，飲料，剛食，軟食，糖菓，及ビ一切ノ娯楽具ノ諸相ハ両掌ヨリ現出シタリ。是の如ク，阿難陀，彼法蔵苾芻ハ前世ニ覚有情ノ行ヲ修シツヽ，一切ノ用具ニ於テ自在ヲ得タリ。

((a)訳，p. 117)

(b) 又一切ノ宝ヲ以テ端厳セラレタル布帛衣服ヲ出シ一切ノ花，焼香，香，花鬘，香膏，傘，幢，幡ヲ出シ一切ノ伎楽ヲ一切ノ毛孔ト双掌中ヨリ出ス，又一切ノ食物，飲（液）食（固体）汁（蜜汁ノ如キモノ）ヲ出ス一切ノ楽ミヲ受クルモノヲ出ス是等ノモノハ双掌中ヨリ流出セリ。実ニ，阿難陀ヨ法蔵比丘大士ハ前世ニ菩薩行ヲ行ヒ一切ニ自在ヲ得タリ。

((b)訳，p. 51～p. 53)

(c) 一切宝の荘厳，一切の引発せられたる被服，法衣，一切の引発せられたる華，焼香，薫香，鬘，塗香，傘蓋，幢，幡，及び一切の引発せられたる楽器，詠歌は彼の一切の毛孔及び両手掌より出でたり，一切の引発せられたる食料，飲料，嚼食，噉食，舐食，味食，又た一切の引発せられたる使用物，受用物も両手掌より流出して顕現したり。是の如く，阿難陀，彼法蔵苾芻は前世に菩薩の行を修じつゝ，一切の資具に於て自在を得たり。

((c)訳，p. 67)

(d) その〔体の〕一切の宝石の飾り，一切の衣服の完成したすがた，また，一切の花や，焼香や，薫香や，華鬘や，塗香や，傘や，幢や，幡の完成したすがた，また，一切の楽器や合唱の完成したすがたは，かれの一切の毛孔および両の掌から現われ出て来た。一切の食物や，飲みものや，噛んで食べるものや，啜(すす)って食べるものや，舐めて食べるものや，味わって食べるものの完成したすがた，また，一切の使用物や受用物の完成したすがたも両の掌から流れ出ながら，現われ出た。

このように，アーナンダよ，かの修行僧ダルマーカラは，前世で求道者の行ないを実行していたときに，一切の用具を自由にできる極みに達していたのだ。」と。

((d)訳，p. 56)

(e) あらゆる種類の宝玉の装飾品や衣服調度品，またあらゆる種類の花や……(中略)……旗幟や幢幡・荘厳の類(たぐい)，さらにはあらゆる楽器・さまざまな歌唱までも，彼のすべての毛孔および両手の掌から出現した。また，あらゆる飲食物，硬い食物・軟らかな食物・舐めて食べるもの・吸い物など，あらゆる種類の立派な食物・旨い食物の類も，彼の両手の掌から流れ出てきた。このように，かの修行僧ダルマ＝アーカラは前世で「さとり」を求めて修行しながらも，一切の必需品を完全に自由にすることができたのである」。

((e)訳，p. 111)

一八九

(f) 一切の宝石の装飾品や，一切のもたらされた衣服・上衣や，一切のもたらされた花・薫香・香料・花環・塗油・傘蓋・幢・幡や，一切のもたらされた音楽・合唱が，かれの一切の毛孔と両手の掌から出てきた。また一切のもたらされた食物・飲料・硬い食物・軟らかい食

物・舐める食物・流動食物や，一切のもたらされた使用物・受用物が，両手の掌から流れ出て，現われた。このように，実に，アーナンダよ，かのダルマーカラ比丘は，前世で菩薩の行を実践していたとき，一切の資具についての自在の極みを得ていた。」

((f)訳，p.p. 80～81)

(g) あらゆる宝でできた装飾品，あらゆる衣・上衣のたぐい，あらゆる花・香料・薫香・華鬘・香油・幢・幡のたぐい，およびあらゆる楽器・歌声のたぐいが，彼のあらゆる毛孔と両方の掌からあらわれ出た。また，あらゆる食べ物，飲み物・硬い食べ物・柔らかい食べ物，舐めてとる（食べ物），啜ってとる（食べ物）のたぐい，およびすべての用具や器具のたぐいが，両方の掌から流れ出て，眼の前にあらわれた。このように，実に，アーナンダよ，かのダルマーカラ比丘は，かつて菩薩の行を実践していたときに，すべての生活用品について自由自在にできる能力を完成していたのである」

((g)訳，p.p. 40～41)

この個所の梵文において abhinirhārāḥ ということばが5回用いられているのであるが，和訳を見てみると，次のようにあらわされている。

(a)訳……「諸相」

(b)訳……「…ヲ出シ」

(c)訳……「引発せられたる」

(d)訳……「完成したすがた」

(e)訳……「類」

(f)訳……「もたらされた」

(g)訳……「たぐい」

(e)訳と(g)訳は同じ意味であろうが，他の訳は，まちまちに訳されている。

このように訳語が違っているのは，恐らく abhinirhāra ということばについて共通する意味の了解がないということであろう。

abhinirhāra ということばは，いうまでもなく，abhi-nir-√hṛ から作られた名詞であり，漢訳では「出，出生，出世，発生，出離，発，所発，起，所起，興，成就，成満，引，所引，引発，作，作用，行，示，修，能演」などの語が当てられている。[2)]

エジャートンは，この abhinirhāra ということばを *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*（『仏教混淆梵語辞典』）の中に入れていて，次のように述べている。

> Rarely used of *production* of physical things, as in Sukh 27・15 ff. of garments, flowers, etc., also music.[3)]

マックス・ミュラー・南条文雄校訂本の当該個所を参照して，このように注意しているのである。

さて，この個所全体が一体何をあらわそうとしているのかということを把握した上で，この abhinirhāra ということばについて考えてみたい。

この個所の最後のところに

> sarvapariṣkāravaśitāpāramiprāptaḥ

という語句がある。pariṣkāravaśitā（「資具自在」）というのは，『十地経』（『華厳経』・「十地品」）によれば，菩薩が第八地（不動地）において得ることのできる「十自在」[4)] の一つである。このことからすれば，この個所の梵文中に，

> このように，実に，アーナンダよ，かのダルマーカラ（法蔵）比丘は，前世に菩薩の行を実践するとき，あらゆる資具自在（pariṣkāravaśitā）の極みを得ていた。

とあるのは，法蔵菩薩が十地の中の第八地に進んでいたことをあらわしていると見ることができる。

香月院の『無量寿経講義』にも，

入大乗論下六右云「於二八地一乃至得二十自在一何等ヲカ為レ十ト寿命自在ト心得自在ト衆具自在ト作業自在ト生処自在ト解脱自在ト神通自在ト願自在ト法自在ト智自在トナリ」。と十地論十十八右経ノ説ニ根拠す。十地経が元で十地論に出る。此中第三の衆具自在と云ふは。諸の荘厳の具に自在をえ給ふこと。今経に珍妙華・香・荘厳之具等を法蔵菩薩の御手より出し給ふは衆具自在なり。……此自在の働が法蔵菩薩永劫の善根力によりて得給ふ勝果の相ぢやと結び給ふ也。[5)]

と指摘されている。漢訳『無量寿経』の伝統的解釈によっても，この個所は衆具自在，すなわち『十地経』で説かれている「十自在」のうちのpariṣkāravaśitā（資具自在）をあらわしているところと見ているのであるが，この資具自在が何のためかということについて，香月院は次のように述べている。

とき浄影の釈は手の中より宝や衣服等荘厳の具を出し。これを以て諸仏を供養し給ふと見給ふなり。此義不可なり。諸仏供養のことは上の段に説き已りて。爰は宝や衣服等御手より出し。衆生へ施し給ふ布施の行なり。これ異訳の経に対映してしるべし。[6)]

浄影寺慧遠の『無量寿経義疏』下巻には，

四手出下，依身起行用。手出供具，供養諸仏。[7)]

と述べられているのに対し，香月院は，諸仏供養のことは既に説かれているので，ここでは，衆生への布施の行として，手より宝や衣服等を出すのであるという。

この個所では，法蔵菩薩が前世において，すぐれた身体を得たことの一例として，資具を自在に毛孔や掌から出すとすることが眼目であって，それが諸仏供養のためであろうが，衆生への布施のためであろうが，どちらでもよいと見ることもできるようである。

さて，以上のことを踏えてabhinirhāraの意味を考えてみると，(b)訳の「…ヲ出シ」，(c)訳の「引発せられたる」などの意を含めて，漢訳経典の

用例に見出される「出，出生，発生」などが適当するように思われる。すなわち，「(毛孔や掌から) 産み出されたもの」である。しかし，この個所の文章では「…毛孔と両手の掌から出てきた。」とあるから，重複を避けて，「(産み出された) もの，品」とする。梵文では複数の abhinirhārāḥ とあるから，「品々(しなじな)」と訳すこととする。結果的には，(e)訳と(g)訳の「類」，「たぐい」に近い訳となるのであろうか。

なお，『十地経』における「十自在」に数えられているものと同じことばであらわされている語として，この個所の pariṣkāravaśitā (資具自在) 以外に，梵文『無量寿経』には，ṛddhivaśitā (神通自在) が二度用いられている。[8)]

最後に，取り上げた「勝果段」の梵文個所の拙訳を試みておこう。

> あらゆる宝石の装飾品や，あらゆる衣服・上衣の品々，あらゆる花・薫香・香料・花環・塗油・傘蓋・幢・幡の品々や，あらゆる音楽・合唱の品々が，彼のあらゆる毛孔と両手の掌から出てきた。また，あらゆる食物・飲料・硬い食物・軟らかい食物・舐める食物・流動食物の品々や，あらゆる使用物・受用物の品々が，両手の掌から流れ出て，出現した。このように，実に，アーナンダよ，かのダルマーカラ比丘は，前世に菩薩の行を実践するとき，あらゆる資具自在の極みを得ていた。

註

1) 拙論「「重誓偈」における一，二の問題－『梵文無量寿経写本集成』所収の「榊本」によって－」(『同朋大学論叢』第64・65合併号，1991．所収)

2) 荻原雲来編纂・辻直四郎協力『漢訳対照　梵和大辞典』増補改訂版，1979年，の abhinirhāra の項 (p. 103，右) 参照。

3) F. Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, の abhinirhāra の項 (p. 52，右)

4) 近藤隆晃校訂『梵文大方広仏華厳経十地品』(Daśabhūmīśvaro nāma mahāyāna-sūtram, 1936)，p.p. 142～143.

5) 香月院深励『浄土三部経講義 1　無量寿経講義』(香月院深励著作集五，1980)，p.p. 505～506.

p.p. 505～506.

6）同上，p. 505.

7）『大正蔵』37巻，105頁，上段。

8）*Sukh.* p. 58, 86.

畝部　俊英（本学教授・仏教学）